雌阿寒岳の火山活動解説資料（令和８年10月）

札　幌　管　区　気　象　台
地域火山監視・警報センター

ポンマチネシリ火口付近では、2025 年９月中旬に火山性地震の増加や火山性微動の発生、同火口方向上がりの傾斜変動、ポンマチネシリ 96-1 火口の噴煙活動の活発化等が認められました。
火山活動が活発に推移する中、2025 年９月、10 月、2026 年３月にごく小規模な噴火が発生しましたが、以降、噴火は観測されていません。2026 年５月以降、傾斜変動は火口方向下がりに転じ、また噴煙量にも減少がみられるなど、火山活動が低下傾向に転じました。６月以降は地震活動にも低下傾向がみられるようになり、10 月以降は低調に経過しています。
これらのことから、ポンマチネシリ火口から約 500ｍの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、11 月４日 10 時 00 分（期間外）に噴火予報を発表して噴火警戒レベルを２（火口周辺規制）から１（活火山であることに留意）に引き下げました。
活火山であることから、火口内に影響する程度の噴出現象が突発的に発生する可能性がありますので、火口内や近傍では火山ガスや火山灰噴出に注意してください。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図１、図２-①、図３、図５-①②⑤、図６-①③、図９-①～⑥）

ポンマチネシリ96-1火口では、2025年９月、10月及び2026年３月にごく小規模な噴火が発生しましたが、３月16日以降、噴火は観測されていません。噴煙活動は、2025年９月12日に噴煙量が増加して以降、活発に推移していましたが、５月頃から噴煙量がやや減少するなど、緩やかに低下がみられています。今期間、噴煙の高さは火口縁上400ｍ以下で経過しました。

その他の各火口の噴気の高さ（いずれも火口縁上の高さ）は、赤沼火口及び北西斜面06噴気孔列では100ｍ以下、中マチネシリ火口では300ｍ以下で経過し、噴気活動は低調な状態です。

・地震及び微動の発生状況（図２-④⑤、図４、図５-④⑦、図９-⑦⑧）

ポンマチネシリ火口付近の地震活動は、2025年９月に活発となり、それ以降も2026年５月中旬に回数が増加するなど時折活発化が認められましたが、６月頃から低下傾向が認められ、10月以降は低調に経過しています。今期間の火山性地震の震源は、ポンマチネシリ火口付近のごく浅い所～深さ０㎞付近、中マチネシリ火口付近の深さ１㎞付近に分布しました。

火山性微動は観測されていません。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・国立研究開発法人防災科学技術研究所）のデータを利用して作成しています。
資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図10ｍメッシュ（火山標高）』、『数値地図50ｍメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。
次回の火山活動解説資料（令和８年11月分）は令和８年12月８日に発表する予定です。

・ポンマチネシリ96-1火口周辺の全磁力の状況（図６-②④）

全磁力連続観測では、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙が増加した2025年９月12日以降、96-1火口付近の地下の熱活動の高まりを示唆する全磁力値の減少がみられていましたが、５月頃から概ね増加傾向が続いています。

・地殻変動の状況（図２-③⑥、図５-③⑥⑧、図７～８、図10）

ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北２観測点では、2025年９月12日に浅部膨張を示す火口方向が上がる変化がみられて以降、緩やかな火口方向上がりの変化が続きましたが、５月以降、火口方向下がりの変化に転じており、その後は特段の変化は認められていません。

GNSS連続観測では、主に東側山麓の観測点による基線で2025年８月末頃から2026年４月頃にかけて山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸びが認められていましたが、以降は特段の変化は認められていません。

８月31日から９月９日に実施したGNSS繰り返し観測では、96-1火口付近を挟む基線では、2020年頃以降、わずかな伸長がみられていましたが、2024年頃以降はわずかな短縮が認められます。また、中マチネシリ火口付近を挟む基線では、2019年以降、火口浅部の膨張を示すと考えられる基線の伸長傾向が続いていますが、2024年頃からやや鈍化が認められます。

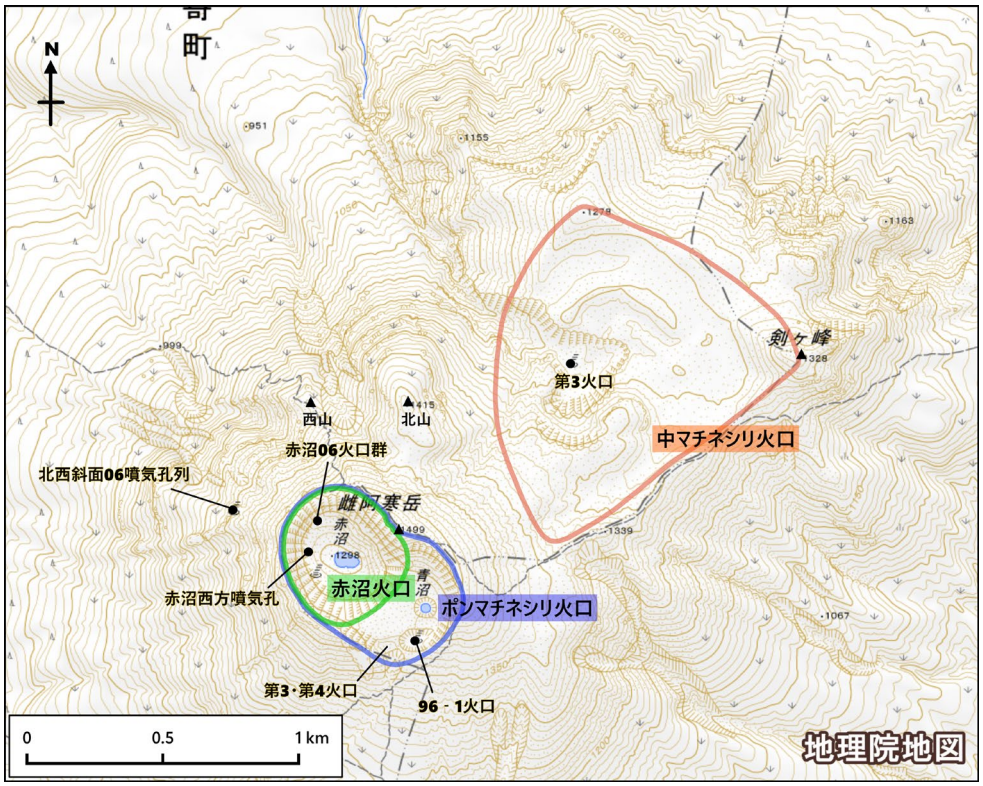


図１　雌阿寒岳　火口及び噴気孔の位置図

各火口の火口縁は、概ねの範囲を示すものです。

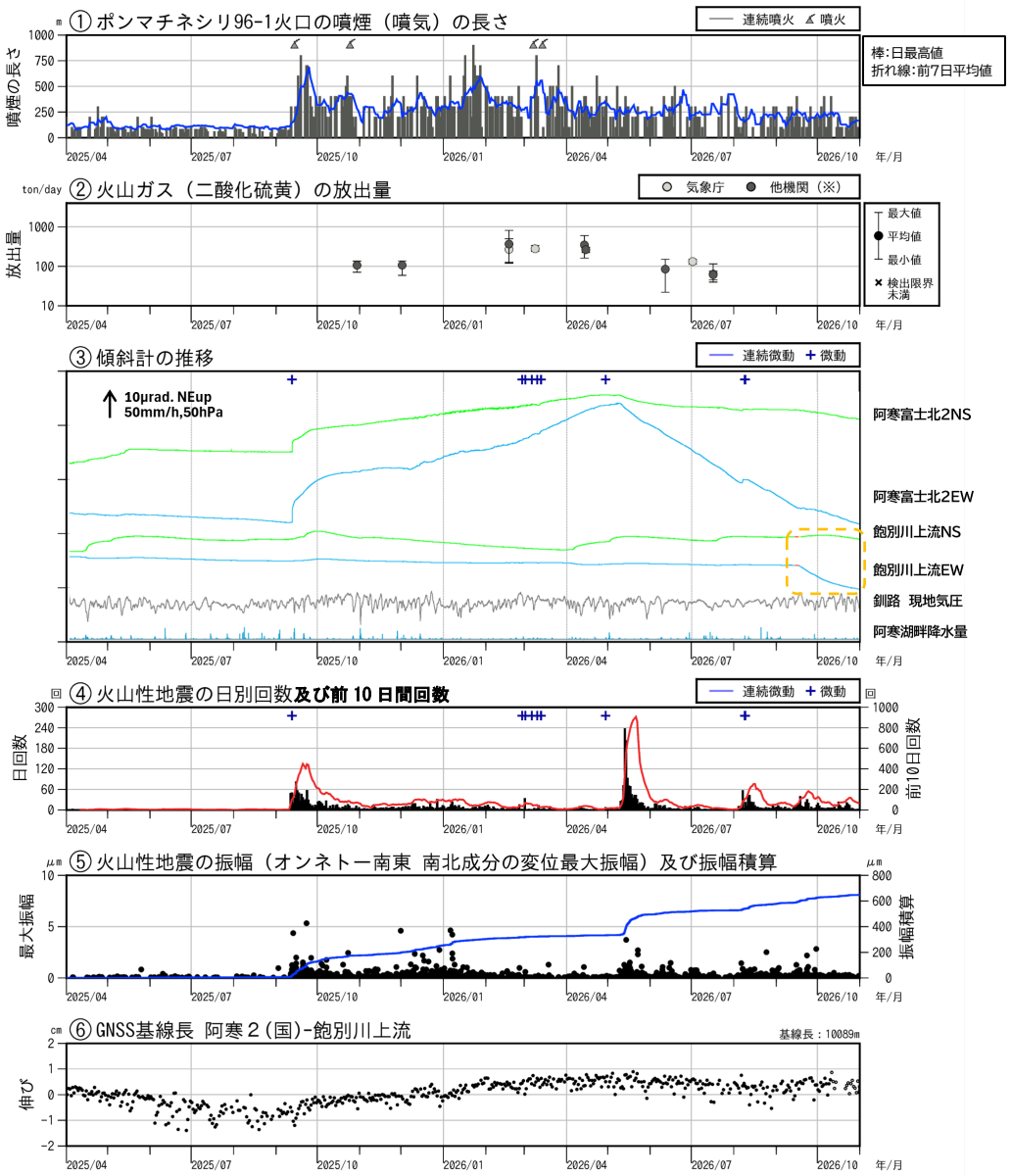


図２　雌阿寒岳　短期の火山活動経過図（2025年４月～2026年10月）

・①の噴気の長さについては図６の説明図を参照ください。
・②の他機関（※）は、北海道大学及び機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・防災科学技術研究所）の観測結果を示します。
・③の傾斜計データには、降水や融雪、気圧変動の影響と考えられる変動が含まれています。また、飽別川上流の直近の変化（黄破線内）は、傾斜計の機器交換を行った影響です。
・2025年９月の噴火は、９月12日から15日の間に発生したと考えられます。
・期間内に発生した火山性地震はポンマチネシリ火口付近の浅部で発生したものが多数を占めます（図４参照）。
・グラフ⑥は、GNSS連続観測の基線図（図10）基線⑨に対応しています。白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

・ポンマチネシリ96-1火口の噴煙活動は、2025年９月12日に噴煙量が増加して以降、活発に推移していましたが、５月頃から噴煙量がやや減少するなど、緩やかに低下がみられています（①）。
・2025年９月12日の火山性微動以降、阿寒富士北２観測点で浅部膨張を示すポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が継続しましたが、５月以降は火口方向下がりの変化に転じており、その後は明瞭な活発化を示唆するような特段の変化は認められていません（③）。
・ポンマチネシリ火口付近の地震活動は、2025年９月に活発となり、それ以降も2026年５月中旬に回数が増加するなど時折活発化が認められましたが、６月頃から低下傾向が認められ、10月以降は低調に経過しています（④⑤）。
・東側山麓の観測点によるGNSS基線では、2025年８月末以降、伸びが認められましたが、４月末頃から鈍化し、以降、特段の変化は認められていません（⑥）。





図３　雌阿寒岳　各火口、噴気孔の噴気（噴煙）の状況

上：上徹別（かみてしべつ）監視カメラによる（雌阿寒岳の南東側から）
下：オンネトー展望台（道）監視カメラによる（雌阿寒岳の西側から）

・96-1火口の噴煙活動は、５月頃から噴煙量がやや減少するなど、緩やかに低下がみられています。
・その他の火口及び噴気孔の噴気活動は低調に推移しています。

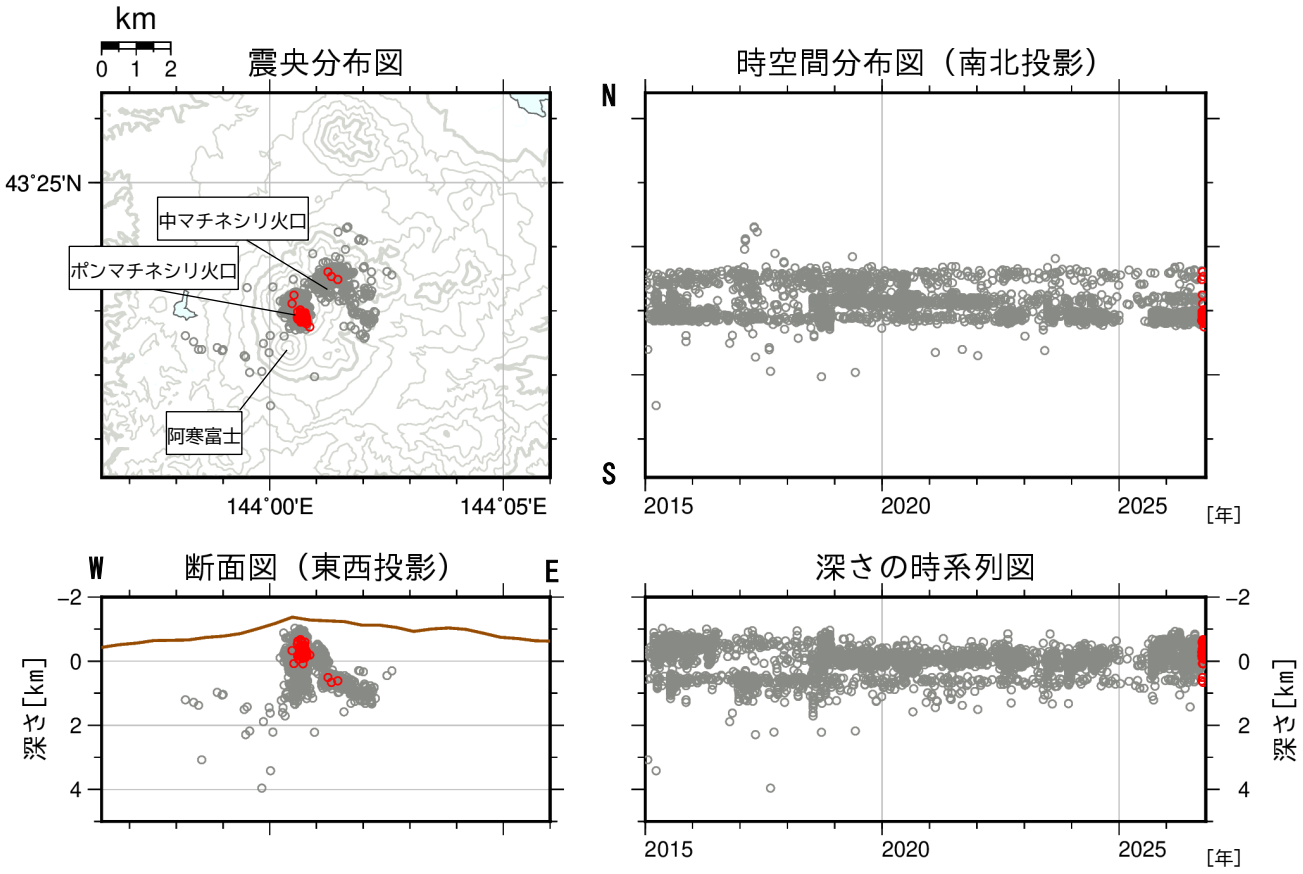


図４　雌阿寒岳　火山性地震の震源分布（2015年１月～2026年10月）

○：2015年１月～2026年９月の震源　○：2026年10月の震源

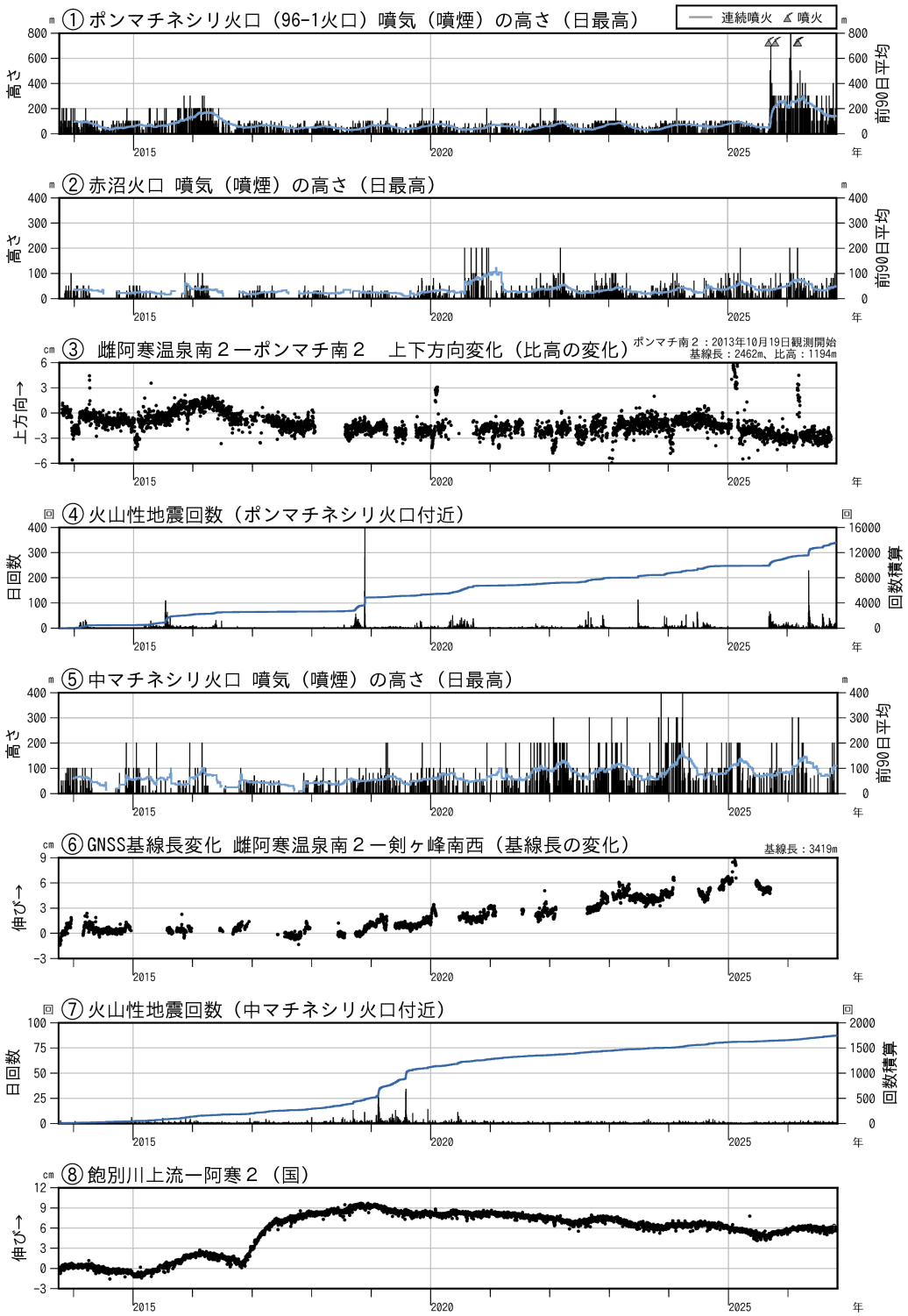
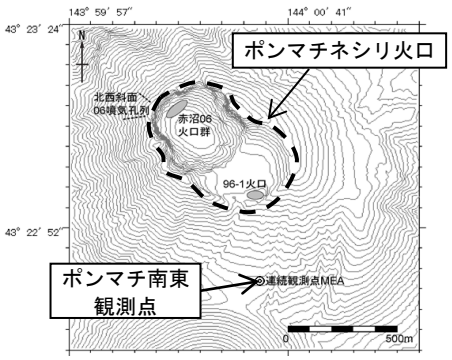


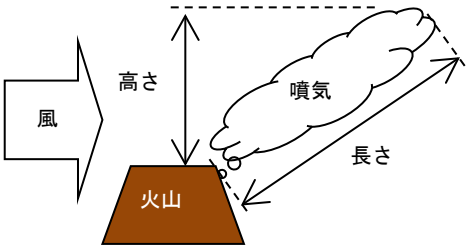
図５　雌阿寒岳　火口別の活動経過図（2013年10月～2026年10月）

・各火口の位置は図１を参照してください。
・グラフ③、⑥、⑧は、それぞれGNSS連続観測の基線図（図10）基線④、⑦、⑨に対応しています。グラフ③、⑥の直近の空白部分は欠測を示します。
・グラフ④、⑦の回数は、雌阿寒岳付近で発生したと計数した地震のうち、発生領域が明瞭に識別出来たもののみを計数しています。

・ポンマチネシリ火口付近では、2025年９月以降、活発な噴煙活動が継続していましたが、５月頃から噴煙量がやや減少するなど、緩やかに低下がみられています。また、同火口付近の火山性地震は、６月頃から低下傾向が認められ、10月以降は低調に推移しています。
・中マチネシリ火口付近の活動状況を示唆する観測データに特段の変化は認められていません。



観測点配置図



噴気の高さと長さ

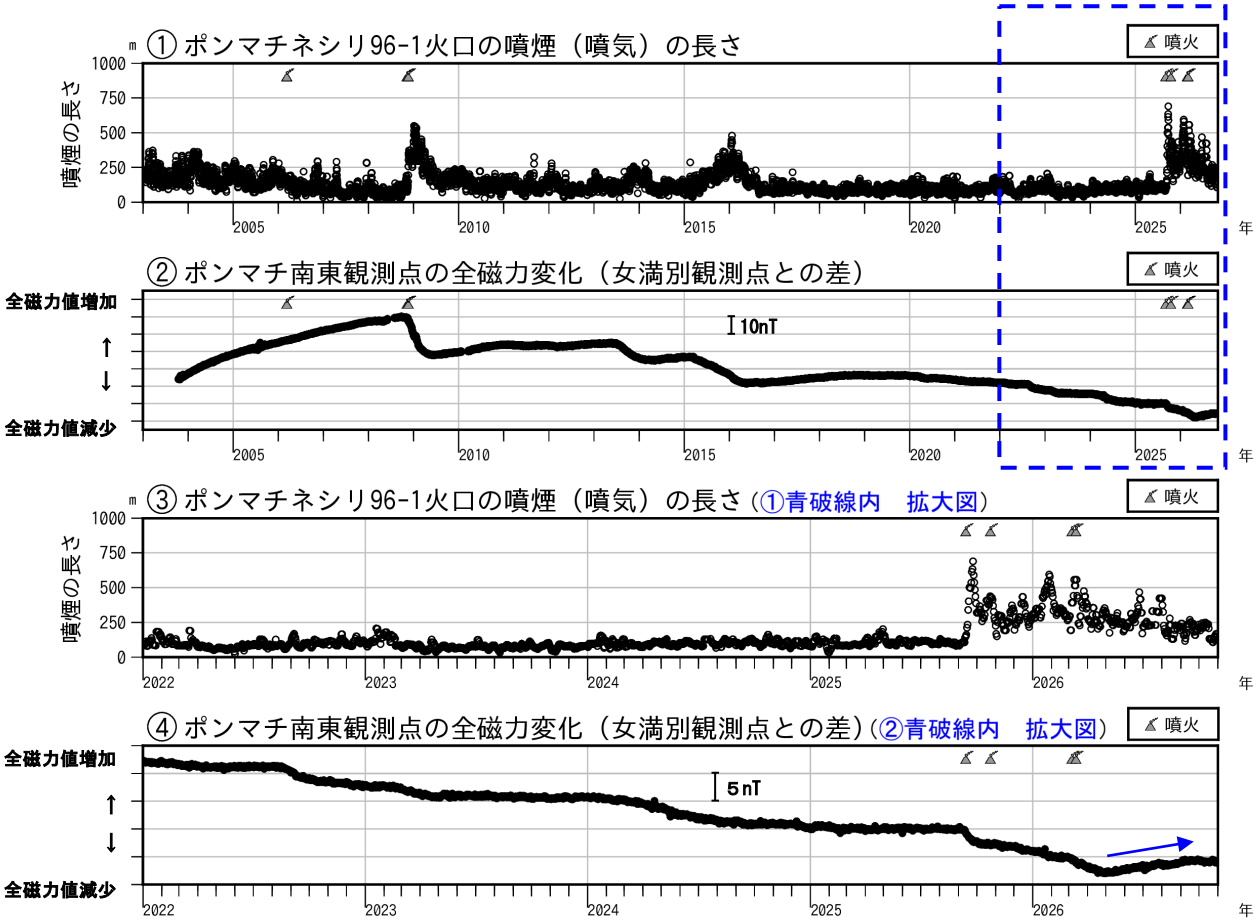


図６　雌阿寒岳　ポンマチネシリ96-1火口の噴気（噴煙）の長さと全磁力値の経過及び全磁力観測点配置図（2003年～2026年10月）

・①③のグラフに示す噴気の長さは気温の影響を受けることから（気温が低いと噴気は長くなり、高いと短くなる傾向がある）、気温補正後の値をプロットしています。
・②④のグラフに示す全磁力値は、地磁気観測所女満別観測施設との全磁力値差をプロットしており（表示開始は2003年10月16日）、空白部分は欠測を示します。
・2006年の噴火は赤沼火口からの噴火です。また、2025年９月の噴火は、９月12日から15日の間に発生したと考えられます。

・96-1火口の噴煙の長さは、2025年９月12日以降増大してその後も活発な状態が続いていますが、５月頃からやや減少しています。
・96-1火口南側のポンマチ南東観測点で、2025年９月12日以降、96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化を示すと考えられる全磁力値の減少がみられ、以降も緩やかな減少傾向にありましたが、５月頃からは増加傾向に転じて推移しています（青矢印）。
・中長期的には、2020年頃から全磁力の緩やかな減少がみられています。

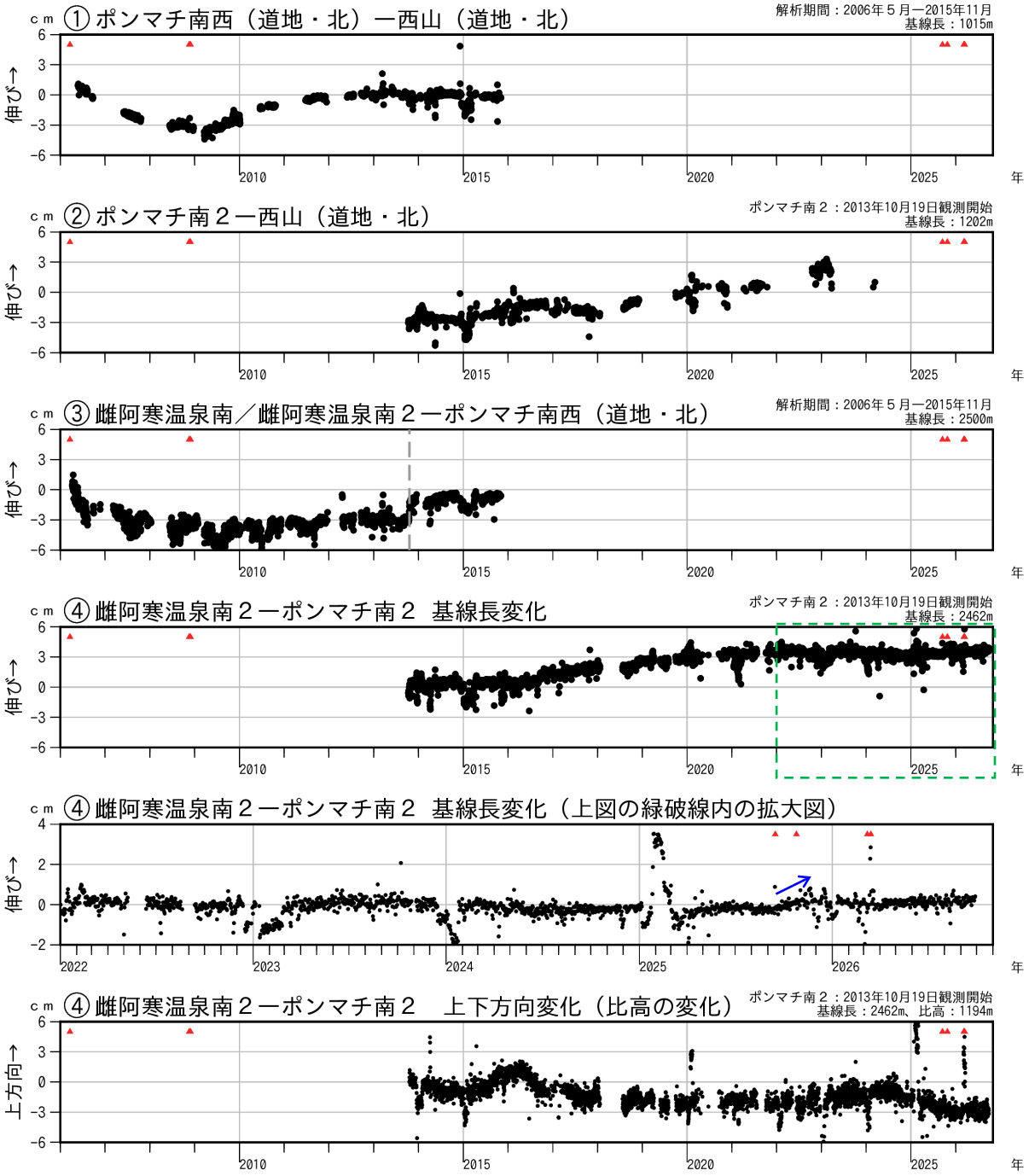


図7-1　雌阿寒岳　GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年４月～2026年10月）

・グラフ①～④はGNSS連続観測の基線図（図10）の基線①～④に対応しています。
・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南２はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線②は①、基線④（基線長）は③と類似した推移を観測していると考えられます。
・基線③の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南２に観測点を移設しています。
・グラフ④は基線④の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南２からみたポンマチ南２の上下方向の動きを表しています。
・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

・基線④（基線長）では、2025年９月中旬から11月頃にかけてごくわずかな伸長（青矢印）が認められましたが、その後、特段の変化は認められません。

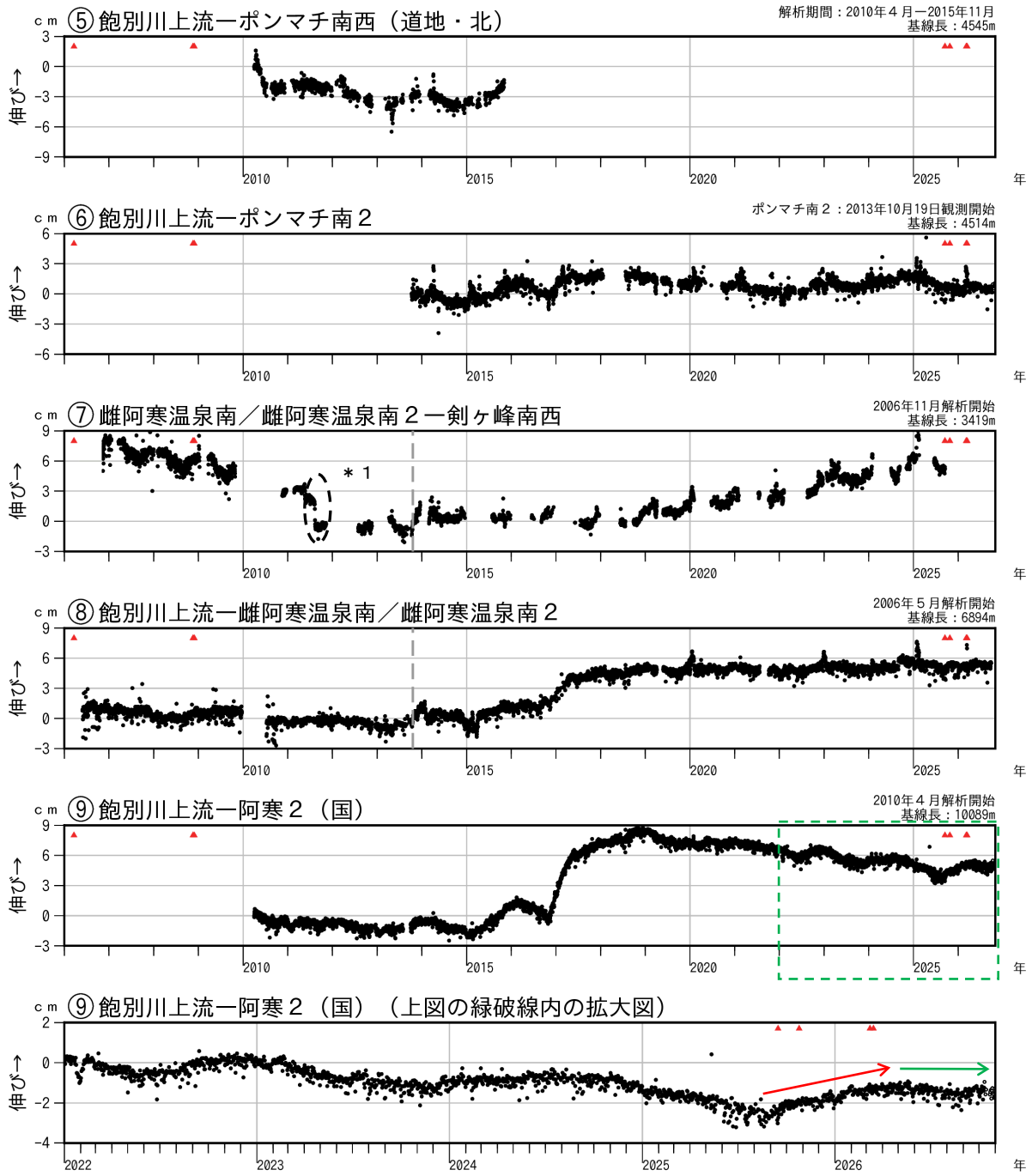


図7-2　雌阿寒岳　GNSS連続観測による基線長の変化（2006年４月～2026年10月）

・グラフ⑤～⑨はGNSS連続観測の基線図（図10）の基線⑤～⑨に対応しています。
・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
・＊１：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。
・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南２はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線⑥は⑤と類似した推移を観測していると考えられます。
・基線⑦⑧の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南２に観測点を移設しています。
・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
・白抜き丸のプロットは速報的な解析結果を示しています。

・東側山麓の観測点による基線⑨では、2025年８月末以降、山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長（赤矢印）が観測されていますが、４月末頃から鈍化し、概ね停滞しています（緑矢印）。
・基線⑦では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長傾向が認められます。

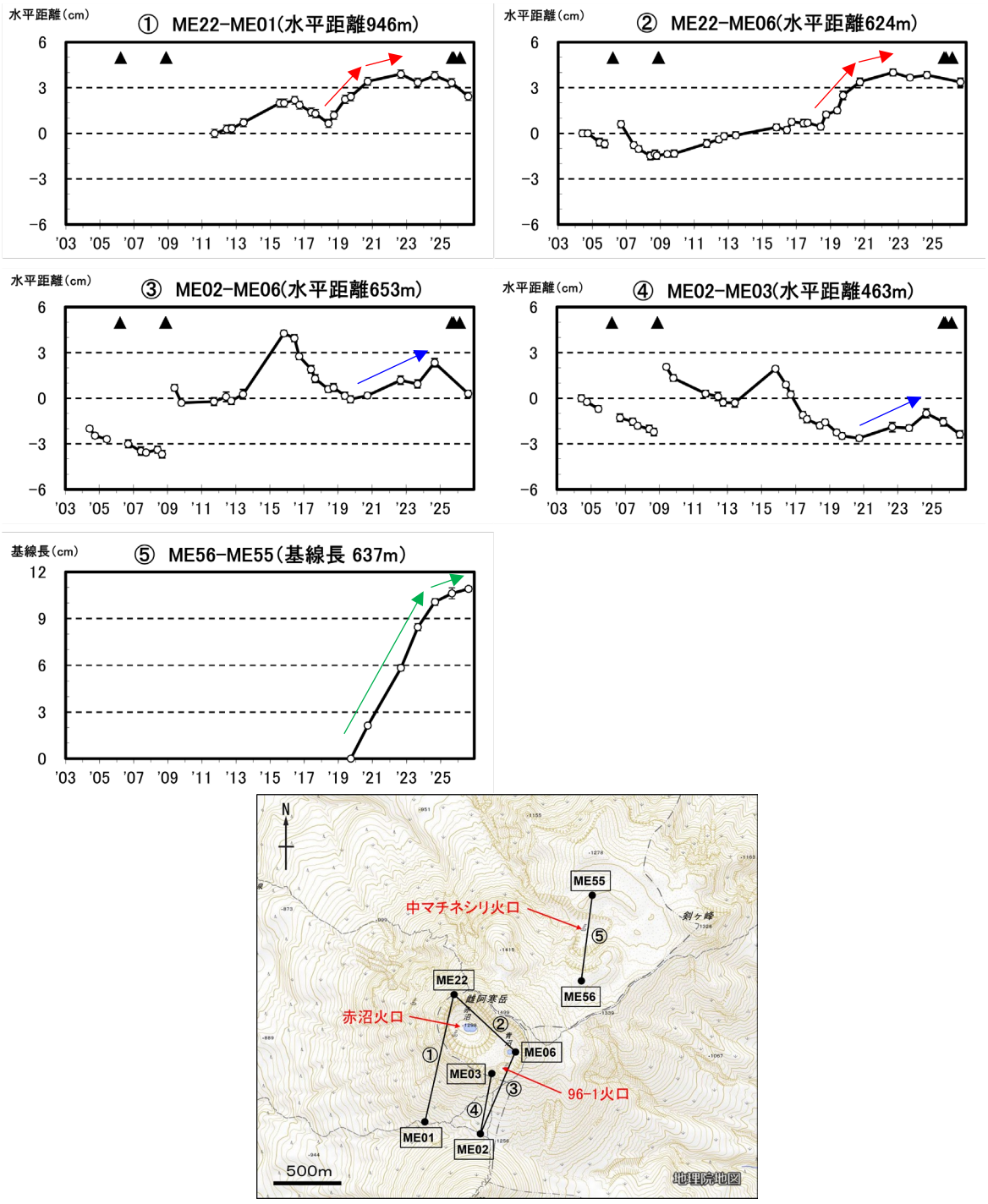


図８　雌阿寒岳　GNSS繰り返し観測による水平距離及び基線長変化（2004年６月～2026年９月）と観測点配置及び基線図

・図中の▲は、2006年３月は赤沼火口、2008年以降は96-1火口からのごく小規模な水蒸気噴火を示します。

・赤沼火口付近（基線①②）では、2018年頃からみられていた伸長の変化は2020年頃から鈍化し（赤矢印）、2024年頃からは短縮の傾向に転じています。

・96-1火口付近（基線③④）では、2020年頃以降、わずかな伸長がみられていましたが（青矢印）、2024年頃以降はわずかな短縮が認められます。

・中マチネシリ火口付近（基線⑤）では、2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆する基線の伸長が続いていますが、2024年頃からやや鈍化が認められます（緑矢印）。

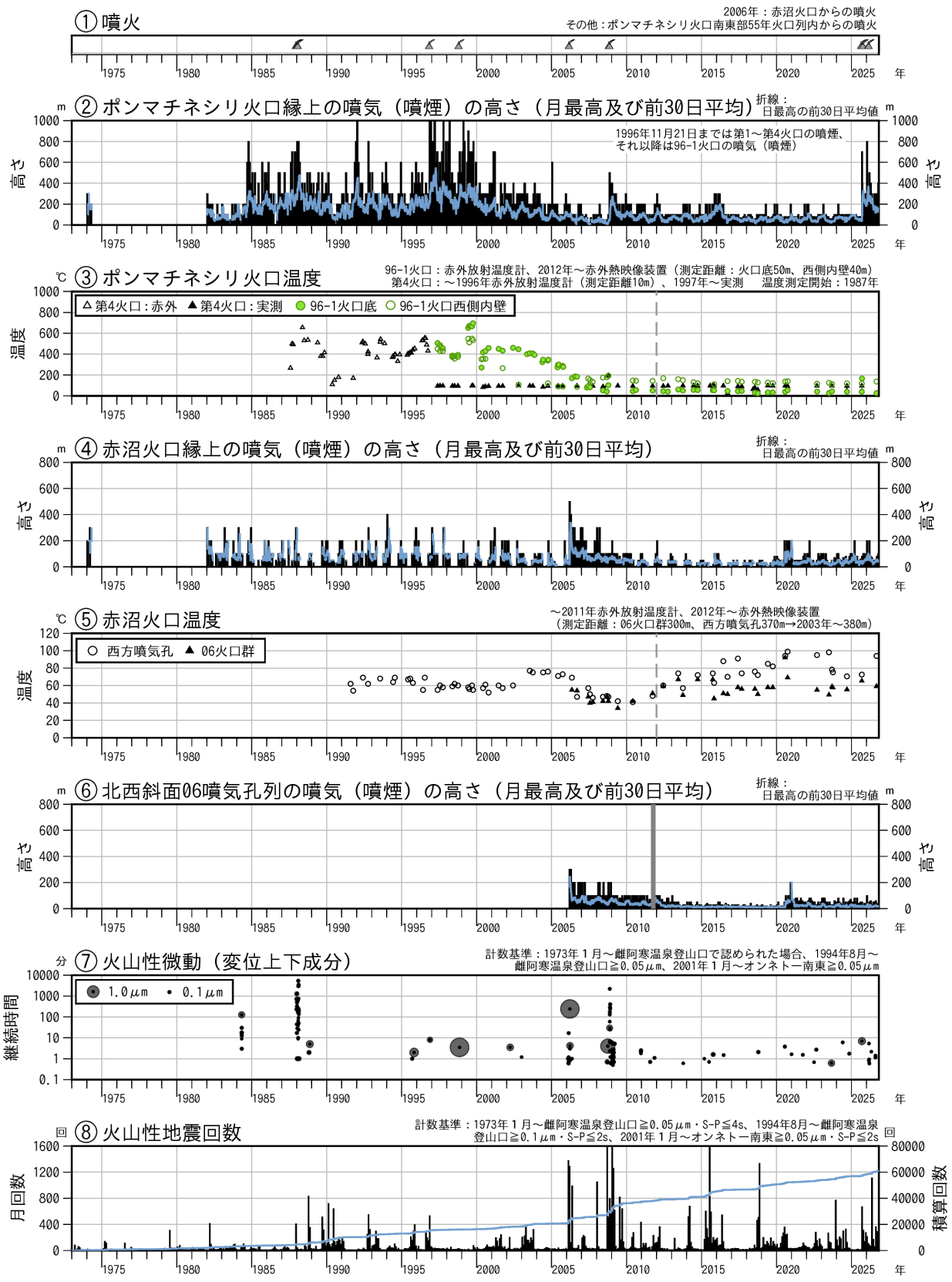


図９　雌阿寒岳　火山活動経過図（1973年１月～2026年10月）

・③：各火口温度は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
・③⑤：測定機器の変更により、2012年（破線）前後では測定温度に差が生じている可能性があります。
・⑥：灰色部分は機器障害による欠測を示します。
・各火口の位置は図１を参照してください。

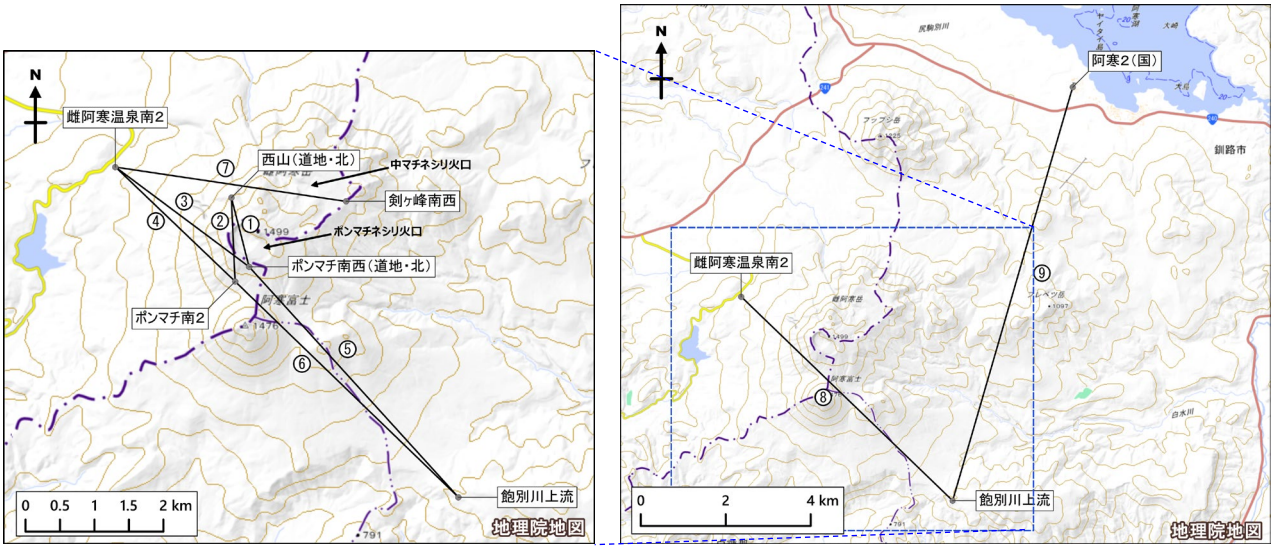
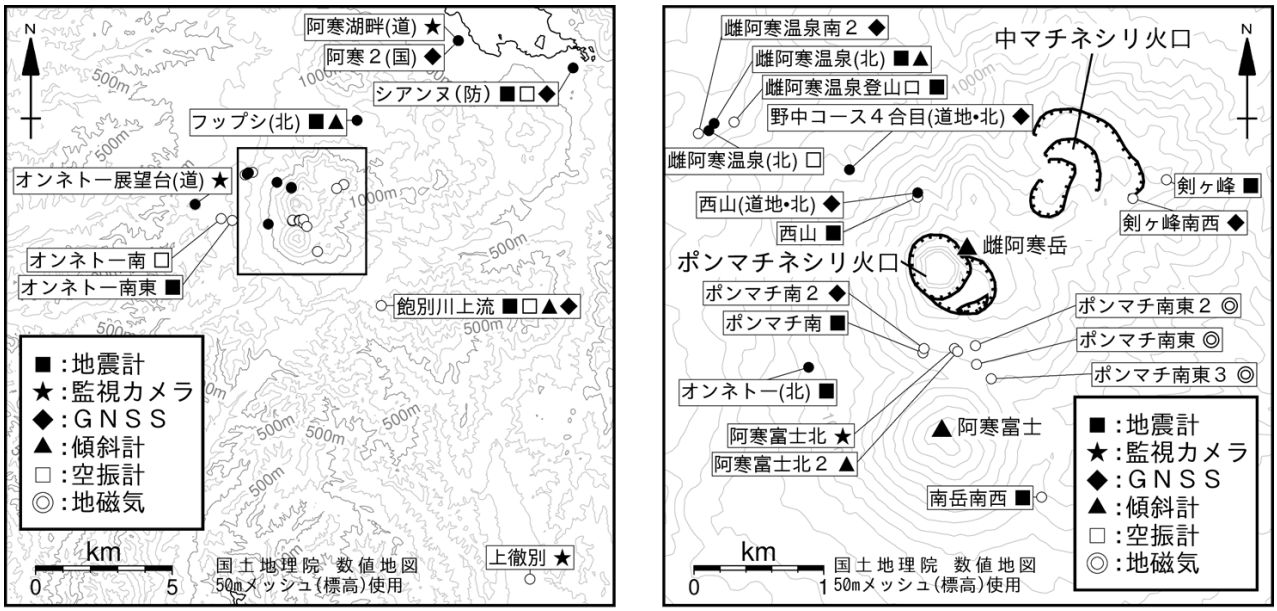


図10　雌阿寒岳　GNSS連続観測の基線図

・基線①～⑨は、図７のグラフ①～⑨に対応します。
・基線⑨は、図２のグラフ⑥に対応しています。
・基線④、⑦、⑨は、それぞれ図５のグラフ③、⑥、⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。左図中の四角囲みは右図の表示範囲を示します。
(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道、
(道地):地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所

図11　雌阿寒岳　観測点配置図